アマチュアオーケストラ

新交響楽団第116回演奏会

―新響マーラーシリーズ第9回―

指揮　山田一雄（新交響楽団名誉指揮者）

ムソルグスキー＝ラヴェル：組曲「展覧会の絵」
Moussorgsky＝Ravel：Tableaux d'une exposition

＊　＊　＊　休　憩　＊　＊　＊

マーラー：交響曲第10番　嬰へ短調　アダージョ
Mahler：Adagio aus der 10. Symphonie

ラヴェル：バレエ音楽「ダフニスとクロエ」第2組曲
Ravel："Daphnis et Chloé" fragments symphoniques – 2^{e} Série

1987年6月21日（日）午後2時

サントリーホール

協賛　日本マーラー協会

山田　一雄

1912年東京生まれ。

1935年、東京音楽学校ピアノ科卒業、37年専攻科修了。マーラーの弟子プリングスハイムに作曲を学び、日本放送協会懸賞1等、ワインガルトナー賞などを得て作曲家としての地位を築く一方、ローゼンシュトックに指揮法を学ぶ。1941年新交響楽団（現N響）補助指揮者、翌42年、日本交響楽団と改組の際、専任指揮者に就任。マーラーの交響曲第8番、ストラビンスキー「春の祭典」、ベートーヴェン「荘厳ミサ曲」等、多くの日本初演、邦人作品初演を手掛け、日本の音楽界の指導的役割を果たした。

現在、京都市交響楽団芸術顧問正指揮者、新星日響名誉指揮者、日本マーラー協会理事長等をつとめる他、東京芸大、武蔵野音大等で指導にあたっている。

76年紫綬褒章、78年芸術選奨文部大臣賞、84年勲四等旭日小綬章、86年芸術院賞を受けた。84年より当団名誉指揮者。

新交響楽団

新交響楽団は1956年3月に創立されて以来、30年にわたり自主的に運営されているアマチュアオーケストラで、百余名の団員の職業は会社員・自営業・主婦・学生など多岐にわたっている。

創立以来、音楽監督芥川也寸志の指導のもとに、ソビエト及び国内の演奏旅行、ベートーヴェン・チクルス、ストラビンスキー3部作一挙上演等を行なった。

1976年の創立20周年記念演奏会「日本の交響作品展」により、「芥川也寸志と新交響楽団」はアマチュアオーケストラとしては初めて第8回サントリー音楽賞を受賞、以来この邦人作品シリーズは1986年まで10回にわたり続けられた。また1979年の第86回演奏会以来、名誉指揮者山田一雄の指導により、グスタフ・マーラーの交響曲に取り組み、マーラーシリーズはこれまでに8回を数えている。新響は年4回の自主演奏会の他に、公共団体、学校等の依頼演奏会も行ない、アマチュアオーケストラの可能性を最大限に追究している。

組曲「展覧会の絵」 ―― トランペットの１番吹きが語る聞きどころ

ロシアの国民楽派「５人組」のひとりであるモデスト・ムソルグスキーが、ピアノ独奏のための組曲「展覧会の絵」を作曲したのは、1874年、彼が35歳の時であった。この年にオペラ「ボリス・ゴドノフ」も初演されており、彼の創作力がもっとも充実していた時代であった。

この曲は作曲者の友人で若くして世を去った建築家・画家のヴィクトル・ハルトマンをしのんで作られた。1874年に故人の展覧会が開かれ、この展覧会のいくつかの絵と他の作品から得た印象より、彼は音楽でハルトマンの思い出と創作活動を回顧しようとしたと思われる。

この曲は色彩感にあふれる、すぐれたピアノ曲としてだけでなく、モーリス・ラヴェルの編曲によるものがオーケストラのレパートリーとして定着している。ラヴェルの編曲は原曲にきわめて忠実で、各楽器の性格とその音色を生かしている。そして巧みな独奏楽器（特に管）の選択により、オーケストラに多様な色彩と表情を与え、オーケストレイションの名手ラヴェルならではの華麗な音色をかもしだしている。

この編曲は、名指揮者セオゲイ・クーセヴィッキ（1951年没）が1922年にラヴェルに委嘱し、同年秋10月19日、パリ・オペラ座にて初演され大成功を収めた。

＊　＊　＊　＊　＊

曲は次の10曲から成り、それぞれ独立した標題を持ち、各々の小品は個性的に多様に描き分けられている。それらに最初の旋律「プロムナード」をはさんで小曲の集まりを統一している。

〈プロムナード〉 *Promenade*

印象的なトランペットのソロで始まり全管弦楽の強奏に終わる。人々が展覧会場の一枚一枚の絵を鑑賞しながら歩く姿が思い浮かぶ。

〈1．こびと〉 *Gnomus*

低音木管と低弦で始まり無気味な感じを漂わす。地中を守る、びっこの小人「地の精」を刻んだ、くるみ割人形を描いたもの。

〈プロムナード〉 *Promenade*

ホルンのソロで始まる牧歌的な感じの２回目のプロムナード。

〈2．古城〉 *Il vecchio castello*

ファゴットの旋律に導かれて、ロマンティックなアルト・サキソホンのソロが吹かれる。中世の城の前で吟遊詩人が歌っている様子が思い浮かぶ。

〈プロムナード〉 *Promenade*

ふたたびトランペットに始まる重々しく、力強いプロムナード。

〈3．チュイルリーの庭、遊んだあとの子供達のけんか〉 *Tuileries*

木管のめまぐるしい動きに始まる音の戯れ。パリのチュイルリー公園で遊び回っている子供達の姿と甲高なおしゃべりを模したもの。

〈4．ブィドロ〉 *Bydlo*

低弦が刻む重々しいリズムにのり、素朴な感じのテューバのソロが歌う。ポーランドの大きな車輪の牛車が田舎道を遠くからやって来て、目の前を通りすぎてゆく。

〈プロムナード〉 *Promenade*

木管に始まる寂しく暗い短調によるプロムナード。

〈5．卵の殻をつけたひなの踊り〉 *Ballet des Poussins dans leurs Coques*

木管の飛び跳ねるような軽妙なスケルツォ。胴に卵の殻をつけたバレエ衣裳のデザインのスケッチをもとにした曲。

〈6．サミュエル・ゴールデンベルクとシュミュイレ〉 *Samuel Goldenberg und Schmuyle*

木管と弦の強奏とミュート付トランペットでくどく奏される。金持ちのユダヤ人と貧しいユダヤ人を対比して描いたもの。

〈7．リモージュの市場〉 *Limoges – Le Marché*

16分音符の速い音型が次々と楽器をかえて奏され、めまぐるしく、にぎやかな感じを聞かせる。フランスの古い都市リモージュの市場での、おかみさん達のおしゃべりをイメージした曲。

〈8．カタコンブ〉 *Catacombae*

管を主体とした鈍重な和音で不気味さを表現し、後半弦のトレモロ上にプロムナードの変奏がオーボエとファゴットによって吹かれる。古代ローマ人がパリの地下に掘った共同墓地内部の情景が、訪れたハルトマンと案内人が持つランプで浮かび上がる。

〈9．バーバ・ヤガーの小屋〉 *La Cabane sur des Pattes de Poule*

力強い旋律に始まり、後半から次の曲に至るまでのうねるようなオーケストレイションがみごとである。ロシアのむかし話に出てくる、鬼婆の住む小屋をデザインした時計の絵より、鬼婆を想像したもの。

〈10．キエフの大きな門〉 *La Grande Porte de Kiev*

金管楽器による壮大な旋律で始まり、途中静かな木管の民謡風のコラールからふたたび主題にもどり、全楽器の圧倒的な強奏によって全曲を閉じる。キエフに建造される新しい門のためのデザイン画の印象を、音によって描き、この荘重で雄大な音楽により、曲を締めくくっている。

（Tp. 野崎一弘）

使用楽譜：Boosey & Hawks
楽器編成：フルート３（３番ピッコロ持替）、オーボエ３（３番コール・アングレ持替）、クラリネット２、バス・クラリネット１、アルト・サキソホン１、ファゴット２、コントラ・ファゴット１、ホルン４、トランペット３、トロンボーン３、テューバ１、ティンパニ、大太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル、タムタム、ムチ、クレセル、シロホン、グロッケンシュピール、カンパナ、チェレスタ、ハープ２、弦５部

マーラー「交響曲第10番」 ―― あるヴィオラ奏者のつぶやき

「ヴィオリストとは音楽を愛する心が自分のテクニックを少しだけ上回ってしまった人のことである」という定義がある。大学のオーケストラでもヴィオラには初心者が多い。彼らのオーケストラの中で音楽をやりたいという情熱は非常に強く、したがって必要なテクニックが（とりあえずは）少なくてすみ、演奏会の舞台に早くのれそうなヴィオラを選ぶことになる。

確かにヴィオラの楽譜はヴァイオリンよりも簡単である。特にアマチュア・オーケストラが普段とりあげる曲では、ヴィオラがヴァイオリンに対抗して旋律を受け持つということはあまりない。8分音符や16分音符の「きざみ」、もしくは2分音符や全音符の「のばし」の多い譜面を見慣れているヴィオリストは、「旋律」を自分とは縁の薄いものと思っている。だからヴィオラに旋律が出てくると、ヴィオリストは何となく落ち着かなくなる。たまには我々だって、と思う心だけが前に出て、なかなかうまく弾けない。結局は「きざみ」や「のばし」に一層の愛着を覚えることになるのである。

最初にこれを書いたのは言うまでもなく、このマーラーの第10交響曲がヴィオラのパート・ソロ（それも全くの無伴奏!!）で始まるからである。15小節の切々とした旋律は、あたかもマーラーの魂が安らぎを求めて中空を彷徨（さまよ）っているかのようである。この旋律はファースト・ヴァイオリンに旋律が移って嬰ヘ長調の和音が響くところまで続く（この和音は魂が安らぎを得たような、もしくは生前の楽しかった時を思い出したかのような暖かさを感じさせてくれる）。

ファースト・ヴァイオリンにでてくるもう一つの主題と交互しながら、ヴィオラのパート・ソロは3回でてくる（3回目はとても難しい）。そして3回目の後にいろいろな動機が室内楽的な響きを伴って展開されていく。冒頭の旋律をヴァイオリンが静かに語り終わったところに突然変ホ短調の和音が鳴り、トランペットの印象的な持続音を経て静かに息の長いコーダに入る。コーダではいくつもの動機が、エピローグ的に細い線でつながれながら奏されていく。最後は低弦の作る和音が下から順に響き、悟りを得たかのように静かに曲を閉じる。

全曲をごく簡単に書いてみたが、最初のヴィオラの切々とした旋律が何度も奏され、全体の雰囲気を支配している点からもその重要性が感じられる。

ここで古今の管弦楽曲に出てくるヴィオラのパート・ソロを思い出してみよう。例えば、「春の祭典」の6人のソロ、ラフマニノフの「ピアノ協奏曲第2番」の第3楽章、バルトークの「オーケストラのための協奏曲」の第4楽章などいくつもあげられる。本日の「ダフニスとクロエ」の前半もヴィオラが旋律を受け持っているし、ブルックナーの第4交響曲には延々と34小節に及ぶものがある。しかしそのどれをとっても、この第10交響曲のパート・ソロには匹敵しえないであろう。それは単に伴奏の有無からくるものではない。楽章中にあってこの旋律が果たす役割の大きさと、そして何よりヴィオラの音色をマーラーが必要としたということが、このパート・ソロの性格をいやが上にも大きくしているのであろう。

マーラーは19世紀の音楽と20世紀の音楽との間に位置する作曲家であるとよく言われる。その例証はいくつも挙げられているが、音域の問題ではなく、不安な、切々とした気分をだすためにヴィオラを用いたという点もその一つに挙げられるだろう。ソ連のヴィオラの名手バシュメットは「現代の不安な状況を語るためにはヴィオラの音色がぴったりなのです」と述べているし、バルトークやヒンデミットなど、ヴィオラのためにオリジナルの曲が多く書かれるようになったのも20世紀になってからである。ヴィオラの音色を「厚い」、「豊かな」、「渋い」という観点からでなく、「不安」なという意味で用いたマーラーは20世紀をいち早く感じていたのかもしれない。

最後にこの曲の経緯について簡単にふれておきたい。

マーラーが着手したのは1910年、彼が50歳の秋である。しかしその後第4、第5交響曲の改訂に時間が割かれ、翌年5月にウィーンで亡くなったため、彼自身の手によって完成されたのは本日演奏される第1楽章だけとなった。

その後1924年にクルジェネークによる第1、第3楽章の改訂と完成、1972年にクックによるいわゆるクック版の完成がある。マーラーは全部で5楽章から成る交響曲を意図しており、それぞれ、(アンダンテ―)アダージョ、スケルツォ、プルガトリオ（インフェルノ）、第2スケルツォそしてフィナーレとなっている。クック版によってその全体像を窺うことも勿論可能である。しかしマーラーによって完成されていたら、死後の世界を彷彿させる音楽ができたのではないかと思う。そして、もしかするとヴィオラにもっと長い旋律を与えてくれたのではないかとも思うのである。

(Vla. 内田吉彦)

使用楽譜：Universal
楽器編成：フルート3、オーボエ3、クラリネット3、ファゴット3、ホルン4、トランペット4、トロンボーン3、テューバ1、ハープ、弦5部

新交響楽団マーラーシリーズ
（指揮はいずれも山田一雄氏）

第１回 花の章
交響曲第５番 1979. 12. 1 東京文化会館

第２回 交響曲第６番 1980. 11. 20 日比谷公会堂

第３回 交響曲第７番 1981. 9. 19 新宿文化センター

第４回 交響曲第９番 1983. 1. 23 簡易保険ホール

第５回 交響曲第２番 1983. 11. 1 東京文化会館
S 大島洋子 A 木村宏子 合唱 新星日響合唱団

第６回 交響曲第３番 1984. 9. 26 昭和女子大人見記念講堂
A 伊原直子 合唱 晋友会・藤沢ジュニアコーラス

第７回 交響曲「大地の歌」1985.7.20 新宿文化センター
S 辻 宥子 T 伊達英二

第８回 交響曲第８番 1986. 4. 6 東京文化会館
S 豊田喜代美・岩崎由起子・大倉由紀枝
A 辻 宥子・春日成子 T 林 誠
Bar 勝部 太 Bass 岡村喬生
合唱 武蔵野合唱団 新響30周年祝祭合唱団
荒川少年少女合唱隊 台東区立金竜小学校
藤沢ジュニアコーラス 多摩ファミリーシンガーズ

第９回 交響曲第10番 1987. 6. 21 サントリーホール

日本マーラー協会事務局長 桜井健二氏の著作
新響マーラー８番（山田一雄指揮）の本番舞台与真が冒頭に掲載

マーラー
私の時代が来た
桜井健二著 定価一八〇〇円／二見書房刊
●いま復活する世紀末の調べ
まれにみる未来への透視力で、今日の時代を確実に予言したマーラー。19世紀末に生きた卓越した音楽家がいま語るものは何か？ このマーラーブームにメスを入れた待望の書！
★貴重な資料を満載／口絵8頁・本文240頁

日本マーラー協会（理事長 山田一雄）
〒101 千代田区神田錦町1-14市村ビル
TEL 03-291-6288
＊ 入会ずい時

電子楽器からオーケストラまで
楽器輸送のエキスパート
（東京）田中陸運（全国）
電話（370）6275
東京都渋谷区代々木４－60－10

「ダフニスとクロエ」 第２組曲 ―― 太鼓叩きが蘊蓄を傾ける

S. ディアギレフ率いるロシアバレエ団は、1909年パリにデビュー、エキゾティシズムとプリミティヴィズムを前面に打出しての斬新な振付や驚異的なテクニックの踊り、大胆な衣裳や舞台美術は、当時文化の最先端の地であったパリに大きな衝撃を与え、低迷していたバレエをより高度な総合芸術へと蘇えらせた。新しい芸術に対する鋭い洞察力と、卓越した興行師の手腕を併せ持った主宰者ディアギレフは、「完璧なバレエは舞踊、美術、音楽の３要素の密接な融合によってのみ実現できる」と考え、ピカソ、ローランサン、コクトーなど多彩な芸術家の協力を得て次々と斬新な企画を打出していった。音楽ではラヴェル、ストラヴィンスキー、プロコフィエフ、サティーなどの名があげられるが、その中でバレエ団が最初に作品を委嘱した作曲家はラヴェルだった。

パリデビューの年、34歳だったラヴェルの作品に注目したディアギレフは早速振付師フォーキンに引合わせた。フォーキンが示した『ダフニスとクロエ』による台本は、原作は３世紀頃ロンゴスが綴ったといわれるギリシャの牧人の田園生活の物語（パストラール）で、その中のいくつかの挿話を彼自身が３幕のバレエにまとめたものだった。作曲にあたっては従来のバレエ音楽のような小曲の連結ではなく、切れ目のない演奏という点で両者は合意した。曲の構想についてラヴェルは後に『自伝的素描』の中で「私の狙いは、私が空想するギリシャを忠実に描き出した巨大な壁画を作曲することだった……」と語っている。完成まで２年以上を費やし、卓越した管弦楽法を駆使して入念に仕上げられたこの曲は、歌詞の無い混声合唱を伴うラヴェルにとって最大規模の作品であり、細部に亘る入念な彩色、全体の堅固な構図と絶妙の調和を持った巨大な壁画として、いうならば舞踊交響曲と呼びうるものとなった。

初演は1912年６月８日、モントゥーの指揮で行なわれたが、作曲の大幅な遅れによる舞踊化への遅れ、ディアギレフとフォーキンの不仲などが原因して舞踊としては成功とはいえなかったものの、音楽は高く評価され、その場に立会ったストラヴィンスキーは「彼の最高傑作であるばかりでなく、フランス音楽の生んだ最も美しい名品の１つ」と讃えた。

なお、全３幕のうち、演奏会用として、第１、２幕をまとめた第１組曲と、第３幕からなる第２組曲とがあり、この場合は合唱部分を楽器で代用することが許されている。

＊　＊　＊　＊　＊

バレエのあらすじ：牧人の少年ダフニスは愛するクロエを海賊に掠奪され、絶望して気絶する。しかしクロエはパンの神の力で救われる。この後が第３幕、すなわち第２組曲の始まりとなる。

最初は『夜明け』と題され、岩を伝うせせらぎの音しか聞こえない静寂の草原にダフニスが横たわっている。やがて空は白みはじめ鳥の声が聞こえる中、羊をつれた羊飼が遠くを通りすぎてゆく。２人を捜す牧人たちがダフニスを見つけ、皆で不安げにクロエを捜し廻っているところへ、羊飼の女たちがクロエをつれて現われ、２人はかたく抱擁する。ダフニスはクロエのかぶるパンの冠を見て、パンの神がクロエを救けたことを知る。すっかり姿を現わした太陽が、喜びに満ちた草原を燦然とした輝きに包む。

『無言劇』：老羊飼のラモンは、パンがかつて恋したことがあるシリンクスという名のニンフにクロエが似ていたので救けたのだと説明する。これを聞いた２人は、パンとシリンクスの恋物語をまねた踊りを始める。草原をさすらうクロエのシリンクスにダフニスのパンが恋心を示すが、ニンフは半獣神のパンを恐れて逃げまどい、蘆の茂みに身を隠してしまう。落胆したパンは蘆の茎で笛をつくり、悲しげな旋律を吹くと彼女は再び姿を現わして笛に合わせて踊り始める。しだいに熱を帯びてくるにつれて戯れの踊りは互いの愛の表現となり、ついにクロエはダフニスの腕の中へ飛び込んでしまう。

『全員の踊り』：２人がニンフの祭壇に感謝の祈りを捧げていると、バッカス祭の扮装をした乙女たちがタンブリンで囃しながら登場する。愛情を込めて抱擁する２人。若い男たちも参加して皆でパンの神を讃えて歓喜の踊りを始める。２人の優雅なデュエットを交え、興奮と熱狂はますます輝かしく高まってゆく。

この全員の踊りには、ギリシャやトルコの民族舞踊にしばしばみられる5/4拍子が用いられており、エキゾティックな雰囲気を盛り上げている。この時代にエキゾティシズムがもてはやされた背景には19世紀末からの植民地の開拓や、古代遺跡の新発見などによる異国への社会的関心の高まりがあったが、一方芸術面でもロマンティシズムが頂点を越え、次なる物の模索をエキゾティシズムの中に求める風潮があった。マーラーが中国の詩を題材に『大地の歌』を作曲したのが1908年、そして1910年に着手した『第10番』は、この「次なる物」を暗示している。

(Perc. 上原　誠)

作曲年代：1909年～12年４月５日（第２組曲としてまとめられたのは1913年）
初　　演：1912年６月８日　パリ・シャトレ劇場・P. モントゥー指揮
(バレエとして)
出　　版：1913年 Durand
使用楽譜：Durand
楽器編成：ピッコロ１、フルート２、アルトフルート１、オーボエ２、コール・アングレ１、小クラリネット１、クラリネット２、バス・クラリネット１、ファゴット３、コントラ・ファゴット１、ホルン４、トランペット４、トロンボーン３、テューバ１、ティンパニ、大太鼓、小太鼓、中太鼓、シンバル、トライアングル、タンブリン、カスタネット、ジュ・ド・タンブル、チェレスタ、ハープ２、弦５部、混声合唱(低音部の楽器で代用できる)

新響とフランス音楽 ― 新響管楽器トレーナー　柴山　洋

新響及び今回のプログラムに祝福を送ります。

フランス音楽が新響のプログラムにのるのは極めて珍らしいことのようです。秋にはドビュッシーの「海」を予定しているとか。オーケストラが新しいジャンルを開拓してプログラムが多彩になるのは大変歓迎すべきことと思います。

オーケストラの演奏者にとってフランス音楽を演奏するさい、他の国の音楽…特にドイツに比べ意識の変革が必要かどうかはわかりませんが、ドビュッシーは次のようなことを言っています。

「私のオーケストレイションでは第１ヴァイオリンの１プルトと３プルトの音色の違いがわかる。それに対し、ワグナーはヴァイオリンとトロンボーンを同じ灰色の壁に塗り込めてしまう。」、「ベートーヴェンのオーケストレイションもモノクロである。ただし黒から白に至るまでのすべての段階の灰色がある。」

記憶が不確かで、特に後者は本当にドビュッシーが言ったかどうか定かでありませんが、なかなか言い得て妙ではありませんか。ここでは焦点は演奏者一人一人にあたり、オーケストラ全体が一つの大きな楽器ではないのです。

マーラーの交響曲第八番「一千人の交響曲」は木管５管の大編成ですが、スコアに次のような指示があります。「合唱及び弦が大人数のときは木管の人数を倍にし10管編成とすること」これも先程のドビュッシーの言葉と相容れないことがおわかりでしょう。またアルバン・ベルクのスコアにはトランペットが高音域の音を出せない場合、どれそれの楽器が替りに演奏するという指示が事細かに書かれていることがあります。奏者が信用できないのなら書かなければよいのに。

ワグナー以降のオーケストラの巨大化、または機能化は、ある面で演奏者の没個性化を招きます。以前、「全員一丸となるのがオーケストラの魅力ですが、」という言い出しで筆者にインタビューしてきたインタビュアーがいました。その人自身全く疑いを持っていなかったように、その言葉は非常に正しいのですが、現実のオーケストラの楽しみはそう単純に言い切れない、もう少し複雑なものでしょう。つまりオーケストラにはアマチュアといえども、役者が揃っているというか、どんなメンバーがオーケストラを構成しているのかに重要な部分があるのです。うまいへたの程度にかかわらず、一人一人の個性を最大限発揮しなければいけない状況が、ドビュッシーの言葉によればフランス音楽には明確に存在するということです。

筆者は新響の管楽器トレーナーを引き受けて４年になりますが、実にここが一番口で伝えにくいところなのです。しかし今回のプログラムのトレーニングを行なって、管楽器諸君の緊張感、戸惑い、未知の物への期待感などいつもと違う感触をおおいに得ています。これは絶対、今回の演奏会のために好結果を及ぼすと確信します。むしろ次回のドビュッシー「海」が正念場となるのではないでしょうか。

オーケストラは一つの小社会です。オーケストラに抱く多様な価値観はアマチュア・オーケストラであるからこそ、またそれを愛する方々であるからこそ、音楽以外の実生活から実感できることと信じます。楽員一人一人が何をやっているかを見て下さい。この一文が演奏会を楽しむ何かの助けになれば幸です。

（フリーのオーボエ奏者、元新日本フィルハーモニー主席）

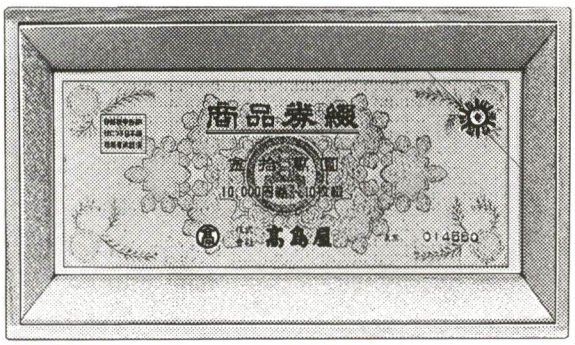
ONO VIOLIN

イタリー製バイオリン、チェロ、ビオラ
フランス製弓各種
修理、調整

〒151
東京都渋谷区代々木１－54－５
第三山野荘苑205号室
電話（375）2673番

小野バイオリン

いつでも どこでも お好きな品を **髙島屋の商品券**



ご予算に応じてお求めいただけます。
1,000円券・2,000円券・3,000円券
5,000円券・10,000円券・20,000円券
30,000円券・50,000円券
100,000円券の9種類。
■お箱代・税金は別途頂戴いたします。

髙島屋の「商品券」は下記の各店でご利用いただけます。
●全国の髙島屋18店・全国のタカシマヤハイランドグループ24店・髙島屋ストア各店・丸髙ストア各店・ホテル内タカシマヤショップ（ホテルニューオータニ・ホテルオークラ・帝国ホテル・ホテルパシフィック）・サンローゼ（赤坂・博多）・ゴールデンローズ（新宿マイシティ・荻窪ルミネ内〝ミアロッサ〟）・セサビー（立川）・柏ローズタウン・堺タカシマヤUP'ル・ウンガロショップ（大阪ヒルトンプラザ内）・パレスサイドビル内タカシマヤショップ

髙島屋



■銀座・本店
中央区銀座2-7-15
PHONE 561-8311

GINZA ITO-YA

■玉川店 708-1721 ■広尾店 442-1108
■渋谷店 499-1801 ■霞が関店 581-7520
■丸の内店 216-0041

ヤマカズさんと新響

「ヤマカズさんの棒は見にくいよ」という話を私は人から聞いていた。新響へ入る前のことだ。私が入団したのは4年前、新響／マーラーシリーズで2番≪復活≫をやった時だった。

この≪復活≫の初合わせの練習の日、ヤマカズ先生はまさに「うなりを上げて！」この曲の最初の棒を振り下ろした。振り下ろす、というよりも、この音楽に体ごと突入した、というのがふさわしいように思えた。

最初のうち私はこの全身全霊の指揮に面喰ってしまって、自分の出るところも出られぬこともあったが、この後3番、大地、8番と続くにつれて、実は「ヤマカズさんの棒はすごく見やすいのだ」ということに遅まきながら気がついたのである。

よく、ヤマカズ先生のことを「燃えてムチャクチャにルバートする」指揮者だと思っている人がいるような気がするが、それは違うのではないか。よく見てみれば、そして同時にその音楽を聴いてみれば、あの全身での指揮というのがいかに多くの情報を含んでいることだろうか。棒の先だけで4拍子をただ4つに振るだけの「交通整理」とは比べものにならないということがわかると思う。ただし新響の演奏がそれにどれだけ忠実であるかは別ですが。

「すごく見やすい」と言ったのは、ヤマカズさんが今どんな音楽をつくろうとしているかが、とても分かりやすく伝わってくるからだ。燃えているというだけではなく、オーケストラのメンバーに「その気にさせる」ためのむしろ職人芸的なものをも感じさせるからだ。

さて、ヤマカズさんの練習は本番と変わらぬ全身表現、全力投球であるから、アマチュアである我々にとっては絶対に手をぬくわけにいかないのだ。

ということは逆に本番でも例えばオケが指示を忘れて弾いてしまっていると、「ちがうって言ったでしょ！」と小言で叫んでしまい、それがテープに録音されてしまったなんていうこともあった。

とにかく音楽を演奏するのにプロもアマもあるかとばかりに、我々に対するいろいろな要求は手加減がない。結果としてそれがムリだったとしても。

そしてこの要求は、何とかして我々にその音楽を理解させようとする必死の思いから出てきているのが分かっていながら、なかなか実現できないもどかしさが我々オーケストラにはある、と言えば少しは大目に見ていただけるだろうか。

いや、音楽を理解させようとする、というのは表現が不適当かもしれない。「ここはこういう音楽をやろうじゃないですか」「ここはすごくクレッシェンドしましょうよ」という共感を求める訴え、とでも言った方がいいだろう。決して「あなたにその場所のピアニシモを命ず！」という要求ではないのだ。それでもオーケストラがどうしても思うようにテンポの移り変わりができないようなことになると、「どうしてついて来て下さらないの！このようになさって下さい！」と、古き良き、丁寧な東京弁（たぶん）で、ほとんど懇願調になることさえある。

私はこれまで無意識的に、指揮者というものはオーケストラの演奏を「正して」―キミ、ここはこうじゃなくてこうやりなさい、そこのF♯の音は7セント低い方がよい云々という指示を与える人だと思っていたのではないかとハッとすることがある。

しかし、ヤマカズさんの指揮は、オーケストラがさまざまな人間の集まりであることを認識させてくれる。おじさんも、学生も、お母さんも、それぞれクセのある人間たちをひとつの音楽に向かわせるには「その気にさせる」ことが必要だということ。

そんなわかりきったことを今さら、と言われるかもしれないが、ふと足もとを見てみれば、例えば音楽の教科で「5段階評価」をして恥じない文化を何となく見過ごしていはしまいか。音楽の授業―音楽に限らず―がすべて「その気にさせる」ことに主眼をおいていたらどんなにすばらしいことか。こんな根本的な問題にもぶち当たってしまったりする。

ヤマカズさんは言っている。「もっと皆さん自分の音楽に自信を持っていただきたい。そうすればもっとすばらしい音楽ができる！」

最後に一言。ヤマカズ先生には「いつまでもお元気でご活躍を」なんて老人に贈るにふさわしいようなコトバは失礼である。我々の方がもっと「お元気に」音楽をなさらなければならないのだから。

(Perc. 今尾恵介)

外国語スクール アイザック は提供します。

スキルの英語から自己表現の英語へ
- 文法力が実践力につながる新システム
- ブロークン・イングリッシュからの脱皮
- あなたの考え方や意見を明確に表現できる訓練
- レベルに応じた適確な指導
- 選び抜かれた講師陣

無料体験レッスン受付中

AM 10:00～PM 9:00

■英語 ■仏語 ■独語 ■スペイン語
■中国語 ■韓国語 ■日本語

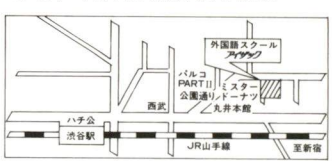
入学随時



- フリータイム制（渋谷校のみ）
  予約なしで、いつでも来れます。レベルに合わせて1クラス1～4人までの少数制
- プライベートレッスン
- グループレッスン
- TOEFL・TOEIC
- ビジネス英語・企業派遣

渋谷校　渋谷公園通り、パルコパートII向い
☎03-463-0271

Isaac Language Instute Inc.
ニューヨーク／サンフランシスコ／ロスアンジェルス／ロンドン／ハワイ／ソウル／東京／神戸／名古屋



本物のコミュニケーションを。



たったひとつのオタマジャクシも大切にしていきたい。

社団法人 日本音楽著作権協会(音権協)
理事長　芥川　也寸志